

県指定史跡

桃里恩田遺跡

沖縄県指定史跡 桃里恩田遺跡の概要

新石垣空港から国道390号を北進すると、特徴的な形をしたカラ岳が見えてきます。そこを通過し、さらに北上すると、採石場入口の手前に開けた場所があり、そこに桃里恩田遺跡を示す標柱と説明版が立っています。

同遺跡は、ペーフ山と呼ばれる小高い丘の頂上付近に形成されています。この一帯の地質は古成期石灰岩で、採石場から近いこともあって、遺跡の一部は採石によって壊されてしまいました。これを受けて、1986（昭和61）年に石垣市教育委員会によって発掘調査が行われました。その結果、中国産陶磁器、八重山で焼かれた中森式土器、石器、食糧残滓の貝殻などが出土しました。また、徳之島産のカムイヤキも出土しています。

これらの出土遺物から、14世紀～15世紀を中心とした遺跡であることが確認されましたが、それよりもっと古くなる可能性も指摘されています。

八重山諸島における古琉球の集落形態などを知るうえで重要な遺跡であるとして、1990（平成2）年2月2日に、沖縄県指定の史跡となりました。



遺跡遠景（左）と発掘調査ポイントのようす（右）：いずれも、発掘調査報告書より



遺跡にある標柱と説明版



桃里恩田遺跡を見学なさる皆さまへ

桃里恩田遺跡範囲内の道路に近い部分に広場があり、標柱と説明版があります。

なお、遺跡本体は、発掘調査後に埋め戻され、現在は雑木に覆われている状況です。

しかしながら、同地に立つと、海に面した小高い丘に立地していることなど、当時の人々の生活が想像されます。

足元には十分ご注意の上、見学してください。